

平成 28 年度関西大学創立 130 周年記念特別研究費（なにわ大阪研究）報告書

住吉・堺の歴史的景観



2017 年 3 月

関西大学なにわ大阪研究センター

住吉・堺の歴史的景観

研究報告

住吉大社境内の石燈籠からみた大阪文化の伝播	黒田 一充	・・・	1
住吉大社と大和川	岡 絵理子	・・・	6
近世堺の地場産業 ―鉄砲鍛冶屋敷井上家所蔵資料が語るもの―	藪田 貫	・・・	8
鞠永代浜住吉祭の造り物	藤岡 真衣	・・・	10
「浪花名所図屏風」のデジタルコンテンツ制作について	井浦 崇・平尾 修悟	・・・	12
「住吉周辺の歌碑・記念碑めぐり」	乾 善彦	・・・	15
「明治貳拾八年十一月十五日 現今建物官営社営略図及明細書」について	橋寺 知子	・・・	115
『住吉松葉大記』からみた近世以前の住吉神宮寺 ―その創建と伽藍景観―	櫻木 潤	・・・	269

本報告書は、平成 28 年度関西大学創立 130 周年記念特別研究費（なにわ大阪研究）
「住吉・堺の歴史景観の復元」の研究成果として公開するものです。

研究期間	平成 28 年（2016）4 月 1 日～平成 29 年（2017）3 月 31 日		
研究組織	研究代表	文学部	黒田 一充
	研究分担者	文学部	乾 善彦
		環境都市工学部	岡 絵理子
		環境都市工学部	橋寺 知子
	非常勤研究員	総合情報学部	井浦 崇
		高野山大学文学部	櫻木 潤
		関西大学名誉教授	藪田 貫
		関西大学非常勤講師	藤岡 真衣

住吉大社境内の石燈籠からみた大阪文化の伝播

黒田 一充

大阪市住吉区に鎮座する住吉大社は、古くから海の神、和歌・文学の神、摂津国一の宮として広く信仰を集めてきた。現在でも、人びとの信仰を集め、正月には多数の初詣の参拝者が訪れている。

海の神としての信仰は、『延喜式』に住吉大神に祈るための遣唐使発遣の祝詞が記載されており、紀貫之の『土佐日記』にも任国からの帰途に通りがかった住吉浦で、荒れた海の船中から鏡を投じて祈った記述がある。この海の神、航海の安全を祈る神としての信仰は全国へ広がり、2300社をこえる住吉神社が各地でまつられている。

遣唐使の廃止後は、海浜に位置する神社のため、風光明媚なことから古くから和歌に詠まれていたこともあり、平安時代中期には和歌の神、文学の神としての信仰を集めるようになり、室町時代の『御伽草子』の「一寸法師」も住吉を舞台にした作品である。

江戸時代になると、各地で河川の掘削や港の整備が行われ、河川や海上の交通が盛んになっていった。それにともない、物資の移動が盛んに行なわれるようになると、輸送途中の船の安全を祈るため、廻船業者や物資の輸送を依頼した業者が輸送中の船の安全を祈って石燈籠を寄進するようになった。

江戸時代の寛永21年（1644）のものが一番古いため、歴史としては比較的新しいものだが、石燈籠の竿や台座の部分に刻まれた銘文には、全国各地の廻船問屋やさまざまな業種の仲間たちが共同で寄進したことが刻まれている。これらは造立当時のものもあれば、地震や台風などの自然災害で倒壊したものや、石の風化によって倒壊の恐れがあるものは撤去されたようである。なかには後継者たちが再建したことや修理したことも、碑面に記録されている。なかには、大坂翫物商寄進の石燈籠のように、後継の業種である玩具関係の組合や企業が補修のための寄進をし、そのたびに台座を加えて高さが増しているものもある。

この住吉大社の石燈籠については、これまでも個々の紹介などは行われていたが、全体をまとめて調査したものはほとんどない。昭和7年（1932）に住吉大社史料所員の梅原忠治郎氏が記録した調書と、今回の共同研究者に加わっていただいた神武磐彦権宮司が中心になってまとめた昭和55年（1980）4月の台帳があるが、いずれも稿本のままである。わ

ずかに昭和 57 年（1984）に同社から発行された『すみのえ』通巻 165 号に地図と一覧表が載せられ、翌年の『住吉大社史』下巻（昭和 58 年・1983）に年次別一覧表が載せられている程度で、石燈籠一基ずつの銘文の内容までは詳しく触れられていない。

昭和 55 年の調査では、境内に 624 基の石燈籠があったようだが、その後 35 年が経過し、平成 7 年（1995）の阪神・淡路大震災で倒壊したため撤去したものや、境内の整備のために場所を移動させたものも多くなっている。平成 26 年（2014）から、住吉祭の記録調査にかかわって来たこともあり、石燈籠の悉皆調査をおこなう機会を与えていただくことになった。

今回の調査では、本社と住吉公園内を通る参道のほかにも、以前の調査ではおこなわれていない境外末社の堺市・宿院頓宮、大阪市港区・港住吉神社の境内もふくめて、石燈籠の位置確認と写真撮影、高さの測量を多数の学生たちの協力で行った。その結果、本社の境内と周辺の参道には 634 基、境外末社にも 22 基の石燈籠が現存していることがわかった。

その結果として分布地図が完成し、国土地理院の地形図にもとづく G I S 地図も完成し、年代や地名など、エクセル表のデータと石燈籠の位置を関連付けることができるようになった。

年代が読み取れるものからは、寛永 21 年（1644）が一番古く、享保年間（1716～36）が一番多いことがわかった。さらに地名を旧国名で分類すると、大坂・堺が 54%を占めるが、あとは松前（北海道）から薩摩まで分布し、内陸部の信濃・飛騨と山陰地方などを除いて、ほぼ全国的に分布していることがわかった。ただし、関連資料の調査で、現在の石燈籠の位置は昭和 5 年（1930）年ごろに境内の奥に散在していたものを前面に動かして整備したものであり、造立当時のままの景観ではないことも明らかになっている。これらの知見にもとづいて、境内の石燈籠を紹介するイラストマップを作成した。今後、これを使ったガイドツアーを住吉大社で 3 月 25 日（土）に開催する予定である。

ほかに、これまでにわかった点を少しまとめておきたい。住吉大社に関しては、江戸時代の初め、17 世紀の半ばごろから、境内や祭礼行列が描かれた屏風などの絵画資料が残っているが、その初期の作品に描かれた境内には石燈籠が描かれていない。サントリー美術館が所蔵する「四天王寺・住吉大社祭礼図屏風」に、本殿瑞垣の前、現在卯の日参道とよばれるところに 6 基が描かれているのが唯一である。

これ以前にも石燈籠があったかどうかは不明だが、江戸時代の中期以降の絵画や境内図になると、石燈籠が描かれ、その数が次第に増えていることは、実際の銘文調査の結果とも一致している。

また、このような石燈籠の調査の前例としては、香川県琴平町の金刀比羅宮があり、668基の石燈籠が調査されて『金刀比羅宮庶民信仰資料集 第3巻』（日本観光文化研究所編、金刀比羅宮社務所 1984年）にまとめられている。同じ海上安全の信仰を集める神社であり、数も住吉と近いものだが、象頭山の麓から奥社を結ぶ参道の高低差を考えると、その調査時の苦労は比べものにならない。ただ、銘文から見た寄進者は、金刀比羅宮が瀬戸内海の沿岸地域が中心となっているのに対し、住吉大社の方は、現在の北海道にあたる松前から日本海側を通して九州の薩摩まで、太平洋側も江戸や仙台からの寄進者があるなど、全国的な広がりを見せている。

大阪文化の伝播については、石燈籠の銘文に記された場所の現地調査を行なっている。40基以上の石燈籠が寄進された伊予・松山については、江戸時代に松山藩の港町であった三津浜に住吉神社が残っており、地名に残っていることがわかった。

富山県高岡市は江戸時代から明治にかけて、大坂から綿が運ばれて加工されて栄えた町だが、市内の関野神社には、住吉大社にある石燈籠と同じ商人たちが寄進し、堺の石工がつくった石燈籠が残っている。また綿商人の旧室崎家住宅には住吉社の風景を彫った欄間が残っている。紅花業者が寄進した石燈籠についても、山形県中山町の旧家に寄進を募る文書が残っていることがわかり、現地調査に赴く予定である。このように石燈籠の銘文に記された業者や人名を手がかりに、大坂側からの視点だけではなく、寄進者の地元からの視点も交えて、大坂へ運ばれた品物と大坂から運んでいった品物、遠隔地の業者が品物の売買でつながっている様子など、近世以降の物資の輸送ルートやネットワークの問題を探っていきたい。



昭和前期のガラス乾板写真（住吉大社所蔵）

石灯笼 MAP

大海神社は

石燈籠の金名文から
公前や賛山支との
交流を知ることもバ
でます。

西国各地の浦名、

東北から阿波までの地名が並び、商人たちの新しいネットワークを生み出すことができています。

◎ 神様のお使い「兎」

住吉大社では、「兎」が神の使いとされています。手水舎にも「兎」の姿が。

◎なにわの路面電車

大阪市と堺市を結ぶ
「ちん電」の愛称で
親しまれる路面電車。

第四本宮前には、
翡翠の「撫で兔」。



金兼倉時代、倉町建の
日本最古の灯台で、
現在のものは
昭和49年(1974)
に再建されました。

南海住吉大社駅 下車。
西へ約 300 m。

取ノ材ノ同座によつて
寄進された石燈籠。

南海之

✓

しおかけ
汐掛道

2

す。

家から寄進され
籠が並びます。

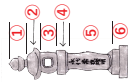


住吉大社

住吉大社は全国に約
2,300社ある住吉神
社の総本宮で、その
歴史は1800年ほど
前まで遡るといわれ
ています。

「すみっさん」の名で親しまれ、お祓い・航海安全・和歌の道・産業育成などのご守護で知られています。

4つある御本殿は「住吉造」といわれる神社建築でも特殊な様式で、国宝にも指定されています。



① 宝珠
頂上の玉ねぎ
状の装飾。

② 笠
屋根の部分。
六角形や四角形
が主流。

③ 火袋
灯火が入る
部分。

④ 中台
蓮の花弁など
の装飾を施す
ことも。

⑤ 竿
もっとも
長い柱の
部分。

⑥ 基座
一番下の
足となる
部分。

① さこば魚問屋の石燈籠	【献納年】 文化九年四月一日 (1812) 【場所】 大鳥居を入った左 北絵馬殿そば		江戸時代に大衆魚を扱った雑喉 場魚市場の商人たちによって奉 納された。題字は、江戸時代中 期の儒学者・国学者五井蘭洲の 筆。
② 南部・松前商客中、大坂 近江屋仁右衛門の石燈籠	【献納年】 延享二年正月 (1745) 【場所】 南角鳥居の南北		大坂と南部・松前の間を往き来 した商人が共同で奉納した石燈 籠。ニシン・昆布・干しアワビ などを扱った蝦夷地や東北の商 人との交流を知ることができる。
③ うつぱ干鰯仲間奉納の 石燈籠	【献納年】 明治二十三年正月 (1890) 【場所】 表参道の北側		干物や肥料にする干鰯などが全 国から集まる鰻塩干魚市場（現 在の鞆公園付近）の商人たちに よって奉納された。 ①や⑨と並び境内最大級。
④ 諸国紅花荷主中、京都 紅花屋中奉納の石燈籠	【献納年】 天保七年三月 (1836) 【場所】 南角鳥居の南側		紅花を扱った業者が寄進した石 燈籠。京都紅花屋中が、この石 燈籠を立てるために寄付を依頼 した文書が、山形県の旧家に 残っている。
⑤ 江戸松坂屋、大坂南中買 古手屋中の石燈籠	【献納年】 寛政七年五月 (1793) 【場所】 吉祥殿南西隅		古手屋とは、古着や古道具を売 買する店のこと。東北から阿波 までの地名が銘文に並び、大坂 と東日本各地をむすぶ商人たち の交流がわかる。
⑥ 大坂新天満町天満屋、 西国諸浦の石燈籠	【献納年】 延享三年九月 (1746) 【場所】 吉祥殿南西側		網元・船主・商人たちが寄進し た石燈籠。 銘文に、瀬戸内・豊後・日向・ 土佐・阿波・紀伊の浦名が並び、
⑦ 阿州藍玉大坂積の石燈籠	【献納年】 天保二年正月 (1831) 【場所】 北大鳥居の西側		阿波の名産である、藍玉を扱っ た業者によって寄進された。藍 玉は、藍の葉を発酵・熟成させ て臼でひき、乾燥して固めた染 料。
⑧ 肥前唐津 練屋市郎兵衛 ほかの石燈籠	【献納年】 享保二年六月 (1717) 【場所】 交通蔵所の西側		銘文には、肥前唐津・出羽秋田・ 大坂の地名や商人の名前が見え る。 笠の曲線が美しい、六角形の石 燈籠。
⑨ 卯之日参道 歌物商 の石燈籠	【献納年】 宝暦十二年九月 (1762) 【場所】 神池東岸の南北		おもちゃの間屋が奉納した石燈 籠。後継者が再建修復を行うた びに石壇が増えて高くなり、現 在まで500以上の人物・企業名 が刻まれている。
⑩ 卯之日参道 豫州松山 の石燈籠群	【献納年】 宝永六年～享保六年 (1709) (1721) 【場所】 卯の日参道		角鳥居前の「卯之日参道」の両側 には、高さ約3mの石燈籠が40 基以上並んでいる。その多くは、 伊予松山と大坂の商人から寄進 された。
⑪ 大坂 吉文字屋清左衛門 の石燈籠	【献納年】 享保二十年四月 (1735) 【場所】 角鳥居の南北		四角柱が珍しい角鳥居の左右 にある石燈籠。 再建されたもので、題字は文 人画家・書家として活躍した 池大雅の筆。
⑫ 大阪巡航合資会社 の石燈籠	【献納年】 明治四十年七月 (1907) 【場所】 南参道の西側		明治36年(1903)に設立された 大阪巡航合資会社が奉納した石 燈籠。 題字の筆者は、近代文人画家の 富岡鉄斎。
⑬ 薩摩の石燈籠	【献納年】 承応三年 (1654) (1806) 【場所】 北牧橋東詰の南側		神池の東側に、薩摩の石燈籠が 5つ並び、そばにある誕生石は、 薩摩藩主島津家の始祖・忠久が 生まれた場所とされる。
⑭ 忍城主能登守阿部朝臣 正敏の石燈籠	【献納年】 天明五年六月 (1785) 【場所】 反橋東詰の南側		石燈籠を寄進した阿部正敏は、 武蔵国忍藩を統治した江戸時代 中期の大名。大坂城代を勤めて いたときに寄進された。
⑮ 陶器商 盟信社の燈籠	【献納年】 明治十四年六月 (1881) 【場所】 南瑞垣門の東側、 南中門との間		境内で唯一の磁器製の燈籠。鮮 やかな色彩が美しい有田焼。 大阪・讃岐・尾張・美濃の陶磁 器業者たちが奉納した。
⑯ 東國積 勢壽講 勢州積荷主中の石燈籠	【献納年】 明治二年九月 (1869) 【場所】 東大鳥居の東西		伊勢の廻船問屋たちが奉納した 石燈籠。 京・大坂と江戸や東国を結んで 品物を輸送した。 は、巳神が祀られている。
⑰ 楠高社の石燈籠	【献納年】 寛永二十一年六月 (1644) 【場所】 楠高社の楠のところ		苔むした笠が美しい、境内で現 存する最古の石燈籠。 楠高さんと呼ばれる大楠の祠に は、巳神が祀られている。
⑱ 浅沢社 松嶋康有志者 の石燈籠	【献納年】 大正六年二月 (1917) 【場所】 浅沢社・神池の島		かつて大阪市西区にあった松嶋 遊廓の有志が奉納した石燈籠。 カツツバタが咲く神池の中の島 に立つ。
⑲ 住友家奉納の石燈籠群	【献納年】 享保十二年～昭和四年 (1727) (1929) 【場所】 住吉公園内の汐卦道 の南北		海上安全と家内安全を願い、 代々の住友家当主が寄進した 28基の石燈籠。もとは境内に散 在していたが、汐卦道の両 側に集められた。
⑳ 住吉高燈籠	【献納年】 昭和四十九年再建 (1974) 【場所】 住吉公園前交差点 西側		日本初の灯台として、鎌倉時代 末に創建されたと伝えられてい る。もとは、現在の場所から西 へ200mほど離れた海浜に建っ ていた。高さは21m。

住吉大社と大和川

岡 絵理子

堺市役所高層館の1階ロビーには、「住吉祭礼図屏風」のレプリカが飾られている。「住吉祭礼図屏風」は江戸時代初期のもので、左右2隻あり、左隻は「夏越祓」での住吉大社の社殿から太鼓橋を渡り神輿行列が堺へ向かう姿が描かれており、右隻は堺の浜通から頓宮へ向かう町人たちの行列が描かれている。市役所1階にあるのは、この右隻である（図2）。屏風は桃山時代から江戸時代初期の堺のまちを描いているといわれている。

この図を見て以来、現在は大和川によって明確に分けられている大阪市と堺市の関係、特に住吉大社と堺市の関係に大いに興味を持った。さらに大和川の川違え^{かわたが}について調べたことがあり¹、それが堺市にもたらした様々な影響を知るにつけ、住吉大社と大和川の関係にも関心を持つにいたった。そこで本稿では、住吉大社と堺の関係、その関係が大和川の川違えによりどのように変化し、現在に至っているかについて、既存の資料からまとめるものである。

■住吉大社と堺

一般に、祭時の神輿行列は氏地を巡るものである。しかし、住吉大社は氏神としての性格は持っておらず、太古から朝廷との関わりが強かったといわれている。とはいうものの、住吉大社が堺と強いつながりを持っていることは、先の屏風に描かれるようにもちろんよく知られていることで、住吉大社の頓宮（御旅所）は堺市堺区の宿院にあり、また住吉大社の田植神事は堺市から来てその役に着くことになっている²という。もともと堺の名の起こりは、中世の摂津国住吉郡堺北荘と和泉国大鳥郡堺南荘に分かれているその境界の荘園として発展したことにある。その両国の境が現在の大小路であるとされている。大小路通の国境としての役割は、1871年（明治4）9月摂泉国境が大和川に変更されるまで続いた。

一方、堺市堺区にある開口神社^{あぐちじんじや}は、堺南組、すなわち大小路以南を氏地とする神社で、住吉大社の住吉三神（底筒男命^{そこつつのおのみこと}、中筒男命^{なかつつのおのみこと}、表筒男命^{うわつつのおのみこと}）を一つにして神徳を現した神とされる塩土老翁神^{しおつちのおじのかみ}と、



図1 住吉大社の堺の位置関係



図2 住吉祭礼図屏風
右隻（『堺市博物館優品図録』より）

¹ 岡絵理子「大阪内陸部の旧大和川埋め立てによる新田開発とその後」、『絵図から読み解く近世大坂三郷周辺地域の環境』、埋立都市大阪研究会、2012.6

² 三浦周行著、朝尾直弘編『大阪と堺』、岩波文庫、1984.6。底本は『日本史の研究』第1輯、1922.5、第2輯、1930.4

素盞鳴神、生国魂神を祀っており、「住吉の奥の院」といわれている。このように、氏地を持たないはずの住吉大社が、なぜ堺と強いつながりを持っているのかを疑問に思っていた。

三浦周行の大阪と堺に関わる論文を集めた「大阪と堺」によると、住吉大社の古文書から、1336年（延元元）から1958年（正平13）に至る間は、堺北荘、堺南荘とも住吉大社の社領であったことが明白であったとの記述があった。その後においても、南北朝時代を通じて「社家の管領するところなりしなり」とのことであった。また、開口神社の古文書によると、12世紀に開口神社の境内に念仏時が創建されたが、室町時代にいたるまでその賽銭は住吉神社の収入であったという。このように、住吉大社が堺市に御旅所をもち、奥の院を持つ理由は、この一帯が住吉大社の領地であったためであった。

■堺と大和川

大和川は、奈良盆地から柏原市の亀の瀬を通り大阪平野に流れ出て、そこからは上町台地の東の河内を北に上り、台地の北を巡って淀川と合流し、大阪の街を幾筋にもなり流れ大阪湾に注いでいた。この川の流れを人為的に流路変更したのが大和川の「川違い」といわれる、1704年（宝永元）に行われた付け替え工事である。工期はわずか8か月だったといわれている。上町台地を切って河内の水を大阪湾に流す試みは何度もされていたが、上町台地が岩盤でその開削は容易でなかった。その証拠に、新しい大和川も上町台地の岩盤に阻まれ、南に流路を変更せざる得なくたつたため、浅香山で南にカーブした流路になっている。

堺にとって大和川の川違いはマイナスであったとされるのが一般的である。それは、第一に新大和川の氾濫で洪水が多発したこと（先述の浅香山のカーブも洪水を引き起こした一因である）、第二に土砂堆積で堺の港が埋没したこと、第三に住吉・堺地域という中世以来一体だった地域が大和川によって地理的に分断されたことがあげられる³。まさに、住吉大社と堺の地理的関係を断つことになったのである。しかし、大和川付け替え300年を記念して行われた堺市博物館の企画展⁴では、プラスととらえた展示が行われた。プラスとされたのは、第一に臨海部の新田開発がなされたこと、第二に大坂との関係が分断されたことによる和泉国一國での経済圏と文化圏が形成されたことの2点とされている。

■大和橋の300年

住吉大社と堺が大和川で分断されてから300年以上が経過している。文化圏、経済圏も異なっており300年である。住吉大社の神輿渡御は、1561年（永禄4）のルイス・フロイスの「日本史」に記載があり、450年以上も前から行われている。大和川の川違いが行われると同時に、大和川にはたった1カ所のみ橋が架けられた。公儀橋である大和橋である。その後、大和橋に神輿火替所ができ、住吉浜では神輿洗神事が始まった。いつのころからか、大和橋があるにも関わらず、神輿が川を渡る「川渡し」が行われるようになった。明治に入り神輿渡御はコレラの流行、堺だんじり騒動、戦争のためとしばしば中止されるものの、1960年（昭和35）に人力による最後の大和川の川渡りが行われた。その後も神輿渡御は少しずつ形を変えたり、昔の姿に戻したりしながら続けられてきた。2004年（平成16）、大和川付け替え300年を記念した川渡りが再び行われた。大和橋があるにもかかわらず、神輿が川を渡る意味を考えると、大和川による地理的分断をどこか許さない、土地のつながりを感じずにはいられない。

³ 西田一彦監修『大和川付け替えと流域環境の変遷』、古今書院、2008.10

⁴ 大和川水系ミュージアムネットワーク編『大和川付け替え三〇〇年 ―その歴史と意義を考える―』、雄山閣、2007.11

藪田 貫

堺市中浜町に所在する井上家は、鉄砲鍛冶屋敷として知られているが、その資料群が、堺市文化財課による確認調査を経て、なにわ大阪研究センターに運び込まれたのは平成 27 年 4 月のことである。その目的は、井上家文書の調査を通じて、江戸期における堺の鉄砲鍛冶の姿、さらに鉄砲生産の状況を把握することである。

平成 27 年度の調査の結果、文書の点数は箱 1～30（計 31 箱）で 10,803 点（目録に記載する項目数）に及ぶ。ただし、白紙や断簡の束などは一括で 1 つの番号を与えているため、実数はこれよりも多いと予想される。文書の作成時期は確認された限りで、寛文 13 年（1673）から第二次世界大戦前に及び、とくに井上関右衛門寿次（文政 7～明治 41＝1824～1908）の時代のものが多い。

堺鉄砲といえば織豊期以降、近江国友とならぶ鉄砲産業の中心地であるが、とくに五鍛冶のひとつで、鉄砲鍛冶年寄を勤めた芝辻理右衛門家が著名である。しかし同家の文書の点数はわずか 106 点に過ぎず、しかも鉄砲生産や販売に関する史料を有していないこと（『堺市博物館研究報告』32、2013 年）を考慮するとき、後発の鉄砲鍛冶とはいえ、所蔵点数の多さ、鉄砲鍛冶業に関する史料の豊かさにおいて、井上家資料は、堺鉄砲鍛冶の歴史を解明する上で最重要文書である。ここでは、平成 27 年度と 28 年度の調査を通じて明らかになった内容のうち、重要と思われる点に限って紹介する。

● 家の由緒

井上家は、慶長年中に堺で鉄砲職になったとの家伝を持つ。これは、慶長 14 年（1609）に井上传兵衛正重という人物が、砲術稲富流の始祖、稲富一夢より秘伝を伝授されたという記録に基づくものと思われる。しかし実在が明らかなのは初代関右衛門で、承応 2 年（1653）、伊予国大洲藩主加藤泰興より「生得元氣并氣世話敷者」との理由で、「関右衛門」の名をもらったことで、以後、関右衛門が井上家代々の通名となった。

● 鉄砲の種類

井上家で製作されたと思われる鉄砲の注文図が、残されているが、そのほとんどは火縄銃であり、細筒・中筒・抱え大筒・据付型大筒（最長 202 センチ）・短筒・火矢筒・三連銃など、様々なサイズ・形式がある。その他、風砲（気砲）と管打（雷管）式西洋銃であり、とくに後者については安政 2 年（1855）、堺全体（鉄砲鍛冶 17 名）で国産の 8 匁玉ゲベール銃が 775 挺あり、井上家はそのうち 75 挺を保有していた。

● 取引関係

井上家で取り扱っていた鉄砲は、「武家方鉄砲」・「百姓威鉄砲」・「獵師鉄砲」である。そのうち、武家方に関する文書の割合が多く、大名・旗本（交代寄合の米良主膳のみ）合わせて 61 家に出入りしていた。幕末から明治初頭にかけては、伊予国大洲・吉田・宇和島藩、豊後国臼杵・岡・日出諸藩からの注文が多いが、つねに中心は大洲藩で、3 人から 7 人の扶持を同藩から貰っている。

- 注文内容

武家方の注文は、鉄砲の詔えと直しに関するものが多く、現存している中で最も古いと考えられる注文は、寛文 13 年（1673）7 月の大洲藩からの鉄砲 40 挺の直しである。武家方とのやりとりについては、最初の注文以外にも度々の催促、注文の変更・取消し、仕様通りでなかったことや輸送時のキズなどのクレーム、返品・作り直し・値引き要求など、注文から納品までの間に紆余曲折も多い。鉄砲鍛冶職が単なる技術工であっただけではなく、商人としての才覚も必要としていたことがうかがわれる。明治に入ると、版籍奉還・廃藩置県により、藩の武器庫の鉄砲は新政府に没収され、武家方の注文は終焉を迎える。そのようななか井上家では明治 14 年（1881）の第 2 回内国勸業博覧会、同 17 年の長野勸業博覧会に猟銃を出品している。明治 20 年代以降は、鉄砲の製造も若干見られるが、修理をおもにするようになり、やがて刃物など種々の金物の生産に移行したという。

- 業務帳簿

鉄砲鍛冶の業務帳簿としては、宝暦 2 年（1752）から明治 30 年代にかけて、「武家方詔鉄砲御窺帳」・「百姓威鉄砲詔御窺帳」・「大福帳」・「万覚帳」（一部が鉄砲関係）など数種類が残り、生産状況を把握することができる。武家方の注文のピークは 1839 年の 280 丁、百姓猟師方の注文のピークは 1866 年の 150 丁となり、従来の通説を覆し、堺の鉄砲産業が「徳川の平和」の下で決して斜陽化したものでなかったことが明らかとなった。

- 鉄砲製造技術

江戸時代の鉄砲製造法を知る手がかりについては、若林元敷「鉄砲作法秘伝書」「中島流砲術管闢録」「大小御鉄砲張立製作」などがあり、「鉄砲作法秘伝書」には、文化 9 年（1812）に 70 匁玉筒を造ったときの付紙がある。科学技術史の上からも注目される。また鉄砲製造技術の伝授を示すものとして、文化 10 年（1813）7 月の「鉄砲張立伝授事（写）」がある。史料には「口伝等伝授」・「不可他言他見」・「神文如件」との文言があり、伝授に当たっての厳粛な雰囲気を与えている。

以上のように、井上家文書は、江戸時代を通じて堺の鉄砲産業の状況を余すところなく伝えるきわめて貴重な資料である。また鉄砲鍛冶屋敷としての敷地・家屋を一部、変更を加えながらも現在に伝えており、建造物としての価値も高い。今日、刃物や線香作り、緞通などが堺の地場産業として喧伝されているが、鉄砲もまたそのひとつであることが明らかである。鉄砲鍛冶屋敷として近い将来、整備され、公開されることが期待される。

靱永代浜住吉祭の造り物

藤岡 真衣

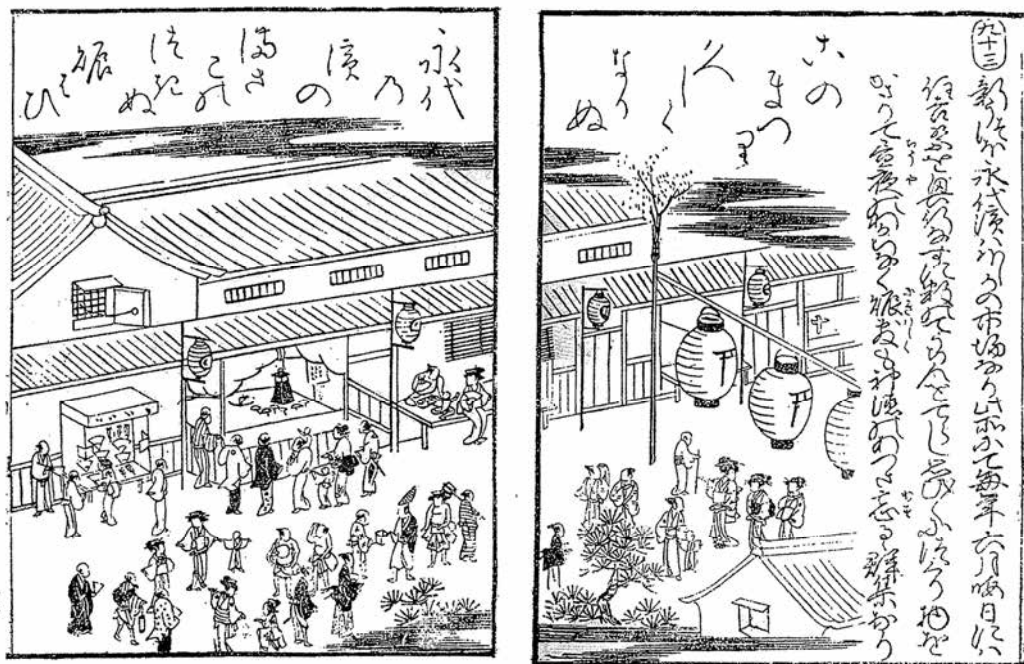
坐摩神社境内の火防陶器神社（大阪市中央区久太郎町4丁目）では、毎年7月21～23日の「せともの祭」に、大量の皿や茶碗を用いた陶器造りの人形が飾られている。その起源は、江戸時代に西横堀の瀬戸物町の陶器商が、夏の地蔵会に陶器造りの人形を奉納していたことに由来する。同じように、靱永代浜でも干鰯を使った造り物が飾られていた。

永代浜は、寛永元年（1624）に完成した後、諸国から運ばれた塩魚や干鰯の荷揚げと市場として賑わった地域であり、現在の靱公園（大阪市西区靱本町）付近にあたる。

住吉神社の祭日の旧暦6月晦日には、永代浜でも住吉祭が行なわれていた。寛政12年（1800）に刊行された『狂歌絵本 浪花のむめ』（四之巻。『浪速叢書』第十二、所収）に、つぎのような記事がある。

新うつほ永代浜ハほしかの市場ナリ 此所にて毎年六月晦日にハ住吉祭^{にきへしく}を興行ナすに
数のてうちんをてらし 思ひ思ひにつくり物をかさりて 昼夜のわかちなく賑敷も神徳
のあつさ忘るゝ群集ナリ

これによると、永代浜の住吉祭には、多くの提灯とともに「つくり物」が飾られていた。同書には「このまつり 久しくなりぬ永代乃 浜のまさこのつきぬ賑はひ」とも記されていることから、寛政年間には祭りが慣例となっていたようである。また、同書の挿絵に、鳥居の印が入った提灯を掲げた通りの光景や、店の間に飾られた住吉の高燈籠の造り物を見物する人びとの様子が描写されている。



『狂歌絵本 浪花のむめ』（四之巻。『浪速叢書』第十二より転載）

さらに、『摂津名所図会大成』（巻之九下。安政2年〔1855〕以後。『浪速叢書』第八、所収）には、永代浜での住吉祭の賑わいをつぎのように記している。

同所ニあり 六月廿九日・卅日浜辺に住吉の神社をかざり立 花麗なる提灯・幟・吹抜・旗等を立つらね 干魚塩魚の商家これを祭る 其壯觀絶勝なり さる程に遠近より詣人群参して賑わへること諸社の神事にひとし 尤平生ハ跡形もなく 此両日に限りて社頭の如し 浪花の一奇觀也 是全く諸国運送の海上安全を大神にいのるがゆへなり 海舶運送にかゝわりし諸商売ハ いづれ此両日ハ住吉大神を祭りて祝ふこと夥しく 浪花に限りて他に双びなき賑ひ也 就中当永代浜を以て魁とす

この記事から、6月29日・30日に、干魚や塩魚を扱う永代浜の商人たちが、住吉祭に提灯や幟、吹抜、旗を飾ったことがわかる。また、海運に関わる業者たちも、海上の安全を祈って住吉神を祀っていたことがうかがえる。

ただし、永代浜のどの辺りに住吉神社があったかは、『狂歌絵本 浪花のむめ』や『摂津名所図会大成』の記事からはよくわからない。しかし、明治21年（1888）10月に作成された「靱共同所有築地組申合規約書」（『資料大阪水産物流通史』三一書房、1971年）には、

摂津国大阪西区靱中通二十一番地

宅地二百五十八坪五勺

同四十九番地

宅地五坪一合一勺

右両地ニ在ル

住吉神社々殿并ニ付属

建家 一棟

倉庫 二棟 七十五坪

とあり、住吉神社は、靱中通21番地と同49番地の辺りに鎮座していた。のちの明治44年（1911）に発行された『大阪地籍地図』をみると、両番地は永代浜の南側、海部堀川の東側に面する土地であり、現在の大阪市西区靱本町1丁目の靱交番交差点付近にあたる。なお、永代浜の住吉神社は、明治40年（1907）に天保町の住吉神社に合祀されることとなった（『大阪府神社史資料』上巻、大阪府、1933年）。

明治期以降の新聞にも永代浜での住吉祭の記事があり、靱の海産物商の人びとが、干魚や塩魚を材料にした造り物を通りに飾ったという。その題材は、歌舞伎などの芸能の演目や、故事に関わるもの、新聞小説に関するものであった。

ちなみに、新聞記事では、明治42年（1909）まで確認することができるが、やがて作られなくなったようである。

戦後、地元の海産物問屋の人びとが、靱の楠永神社の祭りで造り物を一時復活させたという。

「浪花名所図屏風」のデジタルコンテンツ制作について

井浦 崇・平尾 修悟

1. はじめに

「浪花名所図屏風」は、江戸時代の後期から幕末に描かれた作品と考えられ、寺社仏閣や市場、川とそこに架かる橋の風景、市場、芝居町、遊郭など、大坂の名所がパノラマ的に描かれている類例のない唯一の屏風である。浪花名所図屏風における風景を描くにあたって、画家は何冊かの出版物の挿絵などを参考にしたと考えられており、参考にした可能性が強い『摂津名所図会』（寛政8年・1796）と浪花名所図屏風を比較するデジタルコンテンツを制作した。また、各名所について現在の地図、風景と比較することのできるコンテンツとした。

「浪花名所図屏風」に描かれた名所を『摂津名所図会』と比較し、現在の風景とあわせて見ることにより、歴史的景観の変遷をさぐる試みを行った。

2. コンテンツの機能について

過去に制作した「浪速名所図屏風と現在地図の比較」、「浪花名所図屏風と摂津名所図会の比較」を踏襲し、さらに解説文と合わせて比較できるコンテンツを新たに制作した。現在の風景については各名所で撮影された2017年現在の写真を使用した。

メイン画面には地図を表示させ、各名所の所在地にラベルを配置した。ラベルは右隻に描かれた名所か左隻に描かれた名所かで、赤と青に色分けしている。ユーザは知りたい名所のラベルを選択することで、各名所の詳細について閲覧できるようになっている。

詳細の画面には、「浪速名所図屏風」に描かれている風景、『摂津名所図会』に描かれている風景、2017年現在の風景、コンテンツの解説文が表示される（図1）。「浪速名所図屏風」の風景と『摂津名所図会』の風景を比べると描かれている構図は似たものが多く、『摂津名所図会』を参考にして描かれたという可能性を感じることができる。また現在の写真と合わせて見ることで各名所の名残も感じることができるようになっている。



図1. 「和光寺の阿弥陀池」の詳細

過去に制作した「浪花名所図屏風と摂津名所図会の比較」に比べ、いくつかの改善を図った。以前のコンテンツでは画面左の矢印にカーソルをあてることで地図を動かしていたのに対し、本コンテンツではマウスのドラッグによって地図を移動できるようにした。これによってマップの移動時にわざわざ矢印上へカーソルを移動させる必要がなくなり、直感的な操作でスムーズな閲覧ができるようになった。また、画面中央下部に配置されたバーを動かすことで、マップの拡大縮小ができる機能を付与した。マップを拡大して見ることにより詳細な位置関係を確認することができ、縮小して見ることによって名所全体の位置関係を確認することができるようになった（図2上）。この他にも画面右下には、コンテンツの使い方や、右隻と左隻の表示非表示を選択できるボタンを追加し、コンテンツとしての扱いやすさを向上させた（図2下）。

また画面左上のタイトルを選択することで、本コンテンツの解説が表示される。ここでは「浪速名所図屏風」の右隻と左隻も表示し、屏風の理解を深めることができる。



図2. マップ縮小時の全体図（上）と 使い方ガイド表示時（下）

3. おわりに

本コンテンツにおける比較では、「浪花名所図屏風」と『摂津名所図会』の各資料が似ている場面が多く、摂津名所図会を参考にして浪花名所図屏風が描かれたことがよくわかるコンテンツとなった。さらに、現在の写真や解説文と合わせて閲覧することで、各名所の名残を感じられる建造物や石碑を確認することができ、より深い理解を促すことのできる資料となった。

井浦 崇（関西大学総合情報学部）

平尾 修悟（関西大学大学院 総合情報学研究科 知識情報学専攻）

本堂と同様に護摩堂も天喜の回祿の難を免れていたのかもしれない。

ついで、神宮寺の伽藍景観に関する記事は、同じ巻第二十二「造管部二十一」に引用された慶長十二年（一六〇七）の豊臣秀頼による造管について記された「慶長十一年津守」家盛「記」である。その「慶長十二年分」との書き出しがある書き上げに、この時、造管された神宮寺の建物について記されている。すなわち、築地が再興されたほか、南大門や北西東の三つの門、西塔、西三昧堂、東塔、東西両僧房、護摩堂、鐘樓が挙げられている。住吉神宮寺にこれらの建物がいつ頃からあったのかは不明であるが、おそらく十二世紀半ばの住吉神宮寺の伽藍景観を伝えていると考えられる。十一世紀の国基による神宮寺の復興に際しても、それ以前の伽藍整備が目指されたと考えられるから、あるいは、この伽藍景観は、それ以前すなわち、保忠の修造時に遡るとみることもできるだろう。いずれにせよ、中世の住吉神宮寺の伽藍景観は、本堂と東西の一塔、一棟の三昧堂、護摩堂、鐘樓、経蔵、東西両僧房が建ち並び、その周囲を築地が囲み、南大門と北西東に三つの門が取りつく壮麗なものであったと考えられるのである。

おわりに

以上、本稿では、『住吉松葉大記』をもとに、近世以前の住吉神宮寺について考察した。今回は、神宮寺の伽藍景観に注目したが、『住吉松葉大記』には、神宮寺で執り行われていた法会についても詳細に記されている。また、御田植神事や住吉祭などで行われる住吉踊は、神宮寺の僧によって、現在の姿に整えられとともに、各地に伝えられたとされている。住吉大社を考える上で、神宮寺は不可欠な存在である。住吉神宮寺の実態を解明するためには、法会やそこに出仕した社僧を始めとした分析が重要となる。それらについては今後の課題である。憶測を重ねた部分も多いが、紙幅の都合もあり、ひとまず擱筆したい。

(注)

- (1) 管見に及んだものとして、生駒孝臣「平安・鎌倉期の住吉社境内寺院と津守氏—境内寺院別当職の変遷から—」(『大阪の歴史』七五、二〇一〇年)、同氏「住吉社と住吉社神主津守氏の軌跡」(『大阪春秋』一四二、二〇一一年)。
- (2) 『住吉松葉大記』は、大阪市史料第五十八輯『住吉松葉大記(中)』(二〇〇二年)、同第六十三輯『住吉松葉大記(下)』(二〇〇四年)、いずれも加地宏江・中村直人・野高宏之編、大阪市史編纂所、に拠った。
- (3) 『日本古典文学大系』84 古今著聞集(岩波書店、一九七九年)。
- (4) 遼日出典『八幡宮寺成立史の研究』(続群書類従刊行会、二〇〇三年)。

この時、本堂についての記載がないため、天喜元年の火災では、本堂は焼失を免れたのかもしれない。したがって、『松葉大記』によれば、十一世紀後半の住吉神宮寺の伽藍景観は、少なくとも、本堂・東塔・西塔・鐘楼・三昧堂が覺をならべていたことになろう。

神宮寺の復興を成し遂げた第三十九代国基は、応徳元年（一〇八四）には莊嚴淨土寺を建立するなど、「好^ク造^ス寺堂^ニ」つたという。惟朝は、国基が津守家の「中興神主」とする一方、こうした仏教への傾倒に対しては、「大失^ニ神家者之体^ニ」し、「至^ニ好^ムテ而創^ス寺堂^ニ」置^ク三綱^ニ・上座・權上座・寺主・權寺主・都維那・權都維那等^ノ僧位^ヲ」とある。長盛が神主であった時期は、治承二年（一一七八）から承久二年（一二二〇）のこととされ

る。この時の西塔供養がどのようなものであったか具体的には不明であるが、神宮寺に三塔^ヲ置^ク三綱^ニ・上座・權上座・寺主・權寺主・都維那・權都維那等^ノ僧位^ヲ」とある。長盛が神主であった時期は、治承二年（一一七八）から承久二年（一二二〇）のこととされ

る。この時の西塔供養がどのようなものであったか具体的には不明であるが、神宮寺に三綱以下の僧職が設置されたことからみれば、この時、初めて住吉神宮寺の僧官体制が整ったとも考えられる。したがって、国基による神宮寺の復興における西塔の落慶がこの時になったとみることができる。国基の立願以来、すでに百年以上が経過しているが、

摂関期から院政期として治承・寿永の内乱期という、時代が目まぐるしく変転する時期にあたっていることもあり、可能性としてあり得るが、第四十七代国平の項に、正元元年（一一五九）十一月に西塔供養が行われたとあるので、国基による神宮寺の復興の際に落慶した西塔が、その後百年を経て、修造されたとみておきたい。

第四十七代国平の項にある正元元年の西塔供養を最後に、「氏族部」での神宮寺の伽藍景観に関する記載はなくなる。『松葉大記』において、その後の神宮寺の伽藍景観に関する記述としては、卷第二十二の「造堂部二十一」に掲げられる「^{護守ノ則氏}御殿御修理日記」である。こ

れは永正十四年（一一五七）十月十三日付とされ、十年前に東寺の海乗上人の内裏への申上によつて始められた住吉大社の修理についての記録である。そこに「護摩堂二厨ヲ作」。副悉皆経営」とあり、神宮寺の護摩堂に修理本部が置かれ、修理に関する一切の経営が行われていたことがわかる。このことから、住吉大社における神宮寺の占める位置をうかがうことができるとともに、これまでの『松葉大記』の記載にはみえなかった護摩堂が神宮寺に存在していたことが判明する。『扶桑略記』天慶三年（九四〇）十一月二十一日条には、

勅によつて内供奉十禅師の明達を住吉神宮寺に派遣して、藤原純友が降伏するように、十四日間、毘沙門天調伏法を修せしめたところ、純友らが捕縛されたとある。毘沙門天調伏法とは、毘沙門天に敵を打ち破ることを願う密教修法のことである。その際には護摩が焚かれることから、住吉神宮寺には、この時すでに護摩堂があったとも考えられる。天喜元年（一一〇五三）以降の国基による神宮寺の復興において、護摩堂の記載がみえないことは、

今著聞集』が何に拠っているのか明らかに以上、そこにある託宣を奈良時代へ遡及することは慎重でなければならない。ただ、『伝述一心戒文』には、弘仁三年（八一二）九月に、最澄が、弟子光定をともなつて「渡海願」を果たすために、住吉大神に一万灯を供して大乗経典を読んだことが記されている。また、『叡山大師伝』には、最澄が、弘仁五年に、「渡海願」を遂げるため筑紫国に赴き、造像や写経、法華経の講会を行ったことが記されている。法華経の講会は、「八幡大神」の神宮寺と、「賀春神宮寺（院）」で行っており、弘仁三年に住吉大神のために一万灯を供し大乗経典を読んだのは、住吉神宮寺であった可
能性も考えられる。最澄が参詣した頃には、住吉大社の境内に神宮寺が創建されていたとみるのが穏当であるように思われる。すなわち、惟朝が指摘する通り、聖武・孝謙朝から平安時代初期にかけて各地で起った神仏習合の思潮の中で、住吉大社にも神宮寺が創建されたのであろう。

住吉神宮寺の伽藍景観

創建当初の住吉神宮寺がどのような伽藍を有していたのかは不明である。しかしながら、十一世紀半ば以降については、『松葉大記』巻第十九「氏族部十六」・巻第二十「氏族部十七」によってある程度の復元が可能となる。この二巻は、寛文十二年（一六七二）に勅によって、当時の神主津守国治が、靈元天皇の奏覧に供した「津守」系図¹で、天津彦彦火瓊瓊杵尊を始祖とした津守氏の系譜と、「住吉神主ノ始メ、津守氏ノ之祖」である初代の手搓足尼以下、「当正神主」の第六十七代国教までの歴代神主とその事績が記される。住吉神宮寺については、第三十七代保忠以降に散見するようになる。

保忠は、万寿二年（一〇二五）十一月に神主に補任された後、長元三年（一〇三三）十月と長元九年七月に重任されるが、長元九年の重任について、惟朝は、「家譜」によって、勅を奉じて神宮寺を造進した功であるとする。このときの「造進」について、惟朝は、破損による修造とみる。しかしながら、その当時の神宮寺の伽藍景観については不明である。保忠によつて「造進」された神宮寺であったが、天喜元年（一〇五三）に火災の難に遭つたらしいことが、第四十七代国平の項に「天喜元年^{後冷泉元年}神宮寺回祿」とあることからわか
る。保忠は「社務卅二年」とされ、次代の信国の神主補任が、康平元年（一〇五八）正月であつたことからみると、保忠在任中のことであつた。この火災は神宮寺の主要伽藍を焼盡するほどのものであつたようで、その復興は、第三十九代国基によつてなされることとなるが、その復興の過程によつて、当時の伽藍景観がある程度明らかとなる。

国平の項には、国基は神宮寺の復興に際して、「別ニ立願」を起して神宮寺西塔の造営を助けるとともに、東塔は、宇治関白、すなわち藤原頼通が創したとする。また、国基の項には、追記として、「同 二年八月十五日神宮寺鐘楼ニ挂^レ鐘^ニ」と記されており、延久二年（一〇七〇）に神宮寺の鐘楼に梵鐘が掛けられたことがわかる。承徳二年（一〇九八）二月二十三日には、神宮寺三昧堂の供養が執り行われている。これをもつて国基による神宮寺の復興は完成したと考えられる。回祿以来、実に四十五年に及んでいる。ただ、

である。惟朝のいう「住吉大明神ノ御託宣」は、巻第一「神祇第一」の第五番目にある「慈覚大師如法経を書きける時住吉神託宣の事並びに住吉社由来の事」とする説話にある託宣のことである。この説話の前半部は、住吉神宮寺の創建についての興味深い内容を伝えており、長文であるが引用する⁽³⁾。

慈覚大師如法経かきたまひける時、白髪の老翁杖にたゞさはりて、山によぢのぼりけるが、「あなくるし。内裏の守護といひ、此如法経の守護といひ、年はたかく成てくるしう候ぞ」との給けり。「たが御渡候ぞ」とたづね申されければ、「住吉神也」とぞ名乗給ける。皇威も法威もめでたかりけるかな。住吉は四所おはします。一御前は高貴徳王大菩薩也。乗し龍。御託宣云、「我是兜率天内高貴徳王菩薩也。為_レ鎮_二護国家_一、垂_二跡於当朝墨江辺_一、松林下久送_二風霜_一。時_二有_二受苦_一。自当_二北方_一有_二一勝地_一。願奏_二達公家_一、建_二立_一伽藍_一、転_二法輪_一」⁽⁴⁾。これによりて神宮寺をば建立せられけるなり。(後略)

慈覚大師円仁が、一定の規則に従つて法華経を書写していた時に、白髪の老翁が杖に寄りかかりながら比叡山に登つてきたところ、「あめつらい。内裏の守護といひ、この法華経書写の守護といひ、高齡になつてつらくなりました」という。円仁が老翁は誰かと問うと、「住吉の神である」と名乗つた。住吉には四柱の神が奉祀され、そのうち第一の御前は高貴徳王大菩薩であるが、老翁は「私は、弥勒菩薩がいる兜率天内の高貴徳王菩薩である。国家を鎮護するために墨江に垂迹し、松林の下で長らく月日を送っていたが、苦しみを受けることがあつた。社の北方に、すぐれた土地がある。朝廷に奏達して伽藍を建立し、仏法を広めてほしい。」との託宣を發した。これによつて神宮寺が建立されたのである、ということになる。

『古今著聞集』が伝える住吉神宮寺円仁開創説や、一御前が高貴徳王大菩薩の垂迹であることについては稿を改めて論じることとし、ここでは、惟朝が天平宝字二年の靈告を、ここにみえる住吉神の託宣として「所謂靈告トハ蓋シ是ヲ云フナルベシ」としたことをおさえておくことにとどめたい。しかし、この惟朝の解釈には無理があるう。この説話にある託宣は、円仁の頃、すなわち平安時代初期のことと伝わるものであり、おそらく惟朝もそれを分かつていたとみえ、一方で「縦ヒ靈告託宣無_レテモ強_テ当社ニモ宮寺ヲ置_テ給_フナルベシ」との解釈も示している。したがつて、「勘文」にある神宮寺創建に関わる靈告は、不明とせざるを得ない。

以上、みてきたように、住吉神宮寺の創建については、①「別書」にもとづく新羅寺由来説、②「勘文」にもとづく天平宝字二年説、③『古今著聞集』にもとづく円仁開創説の三説があることが知られる。①・②については、その依拠する史料が明らかではなく、③については十三世紀の説話集が伝えるものであるため、創建に関する明確な年代は、今のところ不明とせざるを得ない。②については、『古今著聞集』にある託宣の後半部が、初期の神仏習合思想にはかならず、「勘文」にある靈告はこの思想にもとづく託宣を意味するとして、天平宝字二年という年代に妥当性を認める遼日出典氏の見解がある⁽⁴⁾。しかし、『古

『住吉松葉大記』からみた近世以前の住吉神宮寺

—その創建と伽藍景観—

櫻木 潤

はじめに

住吉大社の景観変遷を象徴的に示すのは、二層の東西両塔が聳え立つ神宮寺の存在であろう。明治以前の絵図には、本堂・東塔・西塔・法華三昧堂・常行三昧堂・大日堂・求聞持堂・護摩堂などのほか総棟数二十四を誇る壮麗な伽藍が描かれ、往時を偲ばせるが、明治初期の廃仏毀釈によって忽然と境内から姿を消してしまう。

住吉神宮寺については、絵図以外の史料が知られていないこともあり、文献学的研究はほとんどなされていない⁽¹⁾。本稿では、十八世紀初頭に成立したとされる『住吉松葉大記』すなよししょうのよのうたひ 大記（以下、『松葉大記』）をもとに、近世以前の住吉神宮寺について考察したい⁽²⁾。

住吉神宮寺の創建

住吉神宮寺の由緒については、『松葉大記』巻第二十「寺院部十七」の冒頭に、次のように記される。

住吉大神宮勘文^ニ曰、神宮寺、孝謙天皇天平宝字二年戊戌依^レ靈告^ニ經^ニ始^ス之^ニ云云、

「住吉大神宮勘文」（以下、「勘文」）が伝えるところによると、住吉神宮寺は、天平宝字二年（七五八）に靈告によって創建されたという。この「勘文」は、『松葉大記』巻第十・十一「勘文部十」に全文が載せられている。『松葉大記』の著者梅園惟朝によれば、「勘文」は、「応永・正長ノ間タ」（一二九四〜一四一九年）に「髻徒の手」すなわち僧侶によって書かれたものとする。したがって、「勘文」の内容は、中世の住吉神宮寺を知る貴重な手がかりとなる。

神宮寺については、巻第十一の「一、神宮寺之事」に、先にみた創建に関する記載について、本尊や日々の勤行、年間の法会が記されている。注目したいのは、そうした記述の後に「今按スルニ」として述べられる惟朝の解釈である。そこには、神宮寺の別名が「新羅寺トモ云フ」とある。その由来については「別書」にもとづき、住吉大神が神功皇后の先鋒として「彼ノ国」を征伐した際に、怨敵といえども甚だ憐れむところがあつて住吉に寺院を建立し、その「亡賊」のために法事を設けて冥福を祈ったことにあるとする。しかし、神宮寺の創建について、惟朝は、「勘文」に伝える通り「本朝仏法ノ盛ンナル聖武・孝謙ノ御時」に、「諸社ニ寺觀ヲ接」することが起こったので、「天平宝字ノ比ナルベシ」と結論づけている。また、創建に関わる靈告について、『古今著聞集』の「住吉大明神ノ御託宣」を挙げている。

『古今著聞集』は、建長六年（一二五四）に橘成季によって著された全二〇巻の説話集



反橋（現況）



御文庫（現況）



第一本宮東側の高蔵２棟（現況）



若宮八幡宮と南中門（現況）

これらの建造物・工作物は、それぞれ丁寧に記されているものの、境内のどこに位置しているのか示した図はない。実は、明治中期の境内の様子は、前述の報告書『住吉大社歴史的建造物調査報告書』でもあまり明らかではない。同書には住吉大社所蔵の絵図や指図など、境内の様子がわかる資料の紹介があるが、そのうち明治期に作成されたものは四点で、明治十四年以前に作成されたものと判断できるものが三点、残る一点「摂津国坐官幣大社住吉神社之図」は、明治十六年の境内図である。明治中期以降の境内図は見当たらない。便宜的に、『住吉大社歴史的建造物調査報告書』掲載の現在の境内配置図に記された建造物と対応させてみると、配置図にリストアップされている六十七件のうち、少なくとも四十二件の記載が確認できた。大正期から昭和期にかけて、住吉大社の境内は大きく変化しており、明治二十八年の記録を現在の境内配置図と比較するのは妥当とは言えないのだが、一〇一件の建造物・工作物の姿図や記述を確認しながら、その前後の境内図、さらに既往研究での知見を合わせて検討していくことで、明治期の住吉大社の境内の様子が明らかになることが期待できる。

○「官幣大社住吉神社境内及附近之圖」

関西大学ならび大阪研究センターが「明治貳拾八年十一月十五日 現今建物官営社営略図及明細書」を入手した際、文書の綴りとともに、一枚の境内の配置図が含まれていた。和紙に着色の配置図で、「官幣大社住吉神社境内及附近之圖」と題され、縮尺三百分の一で、第一本宮付近から南海本線住吉公園駅付近まで、境内の主要な建物や工作物、参道などが描かれている。この配置図には作成年月の記入がないが、記述内容から、「明治貳拾八年十一月十五日 現今建物官営社営略図及明細書」の付図とは考えられない。それより後の作図と推察される。

配置図の記述内容をもう少し詳細に見る。南海本線住吉公園駅と阪堺線の住吉神社前停留所が描かれている。南海本線は明治十八年、阪堺線は明治四十三年の開業であるので、この配置図は明治末以降の様子を表したものと判断できる。境内に関しては、四つの本宮より南側しか記されていないが、大正三年に新築された社務所や大正四年新築の神館が本宮の南側に描かれている。社務所が現在の位置、つまり本宮の北側に移築されるのは昭和五年であるので、この配置図は、大正中期以降昭和五年以前の様子を記したものと考えられる。またこの配置図には、矢印付きの線などの書き込みがなされている。凡例には「御休憩所」や「舞楽台覽所」、「御参向道」、「御下向道」といった語が並んでいる。御休憩所は神館内中央の一番奥に設けられ、舞楽台覽所は、石舞台が望める神池の西側に設けられている。凡例での言葉遣いから、皇族、あるいは高位にあつた人物の参詣に際しての計画図ではないかと推測される。

招魂社
 末社五所御前
 末社誕生石
 末社苗見社
 末社貴船社
 末社長岡社
 神宮遙拝所
 末社后土社
 末社今主社
 末社龍社
 末社海士子社
 末社新宮社
 末社市社
 神饌所（侍者社か？）
 末社鉾社
 末社八所神社
 末社楯社
 末社児安社
 末社斯主社
 撰社若宮神社
 撰社船玉神社
 撰社志賀神社
 撰社大海神社鳥居
 撰社大海神社
 西大鳥居、東大鳥居、南大鳥居、北大鳥居



第一本宮本殿（現況）



第三本宮および第四本宮（現況）



角鳥居と幸壽門（現況）

（門や籬、塀などは省略）

六月に第一本宮の仮遷宮が実施され、修理が行われた。同年十二月には、最も破損が甚だしかった第四本宮の仮遷宮が行われた。修理や屋根の葺替えを行い、明治十一年五月に第一・第四本宮、翌十二年三月に第二・第三本宮の正遷宮が行われている。一度目の遷宮は明治三十年代で、第一本宮の棟札の記載によると、前回の遷宮から二十年目の明治三十一年に屋根の葺替えが出願されたが、許可を得るのに二年を要し、明治三十四年に着手・落成したことが分かる。第二本宮以下の修繕は先に延ばされ、明治三十九年から四十年にかけて完成した。

「明治貳拾八年十一月十五日 現今建物官営社宮略図及明細書」は、この二回の遷宮を伴う大規模な修繕工事の間に作成された。作成年を考えれば、明治三十年代の明治期二回目の大規模修繕の計画をいよいよ具体化しようとする頃に作成されたものと推測できる。

○書きとめられた建物や工作物

「明治貳拾八年十一月十五日 現今建物官営社宮略図及明細書」には、第一本宮から始まって主な社殿、それらに付属する垣や土塀、付属建物、鳥居や門、そして末社や蔵、橋などの工作物も含め、一〇一件の物件が列挙されている。本宮では、本殿、拝殿、渡殿は、別々の一件と数えての一〇一件である。一件ごとに、基本的に正面図と側面図、簡単な平面図が作成され、建坪や高さ等の記載がある。全ての物件ではないが、建立時期、修理時期、修理内容の記載、そしてその資金を寄付した団体等が記されている。明治十年から十二年にかけての大修理以後の小規模な修理についての言及もところどころ見られ、近代の住吉大社の造営史を明らかにする上で、重要な情報が書かれていると言える。

細かな工作物は省略して、記載されている主な建造物名称を列挙すると、次のようなものが取り上げられている。

第一之本宮
第二之本宮（本殿正面図は見当たらない）
第三之本宮
第四之本宮

第一之本宮瑞籬南四足門、北四足門
仮社務所、仮社務処西薬医門

高倉

東神饌所

神楽所

神輿庫

文庫

神馬屋

蓮池北側絵馬掛所

楽所（右方、左方）

皇典研究所・講社取扱所

絵馬掛所（南、北）

角鳥居

反橋、便宜橋



第一本宮拜殿（現況）

橋寺 知子

「明治貳拾八年十一月十五日 現今建物官営社営略図及明細書」について

関西大学なわ大阪研究センター所蔵資料に、「明治貳拾八年十一月十五日 現今建物官営社営略図及明細書」と題された大阪市住吉区・住吉大社の建築に関する記録文書がある。この文書には、明治二十八年（一九〇五）当時、境内に存在した建造物の正面図、側面図、平面図等が略図で示され、建造物の来歴、修理や建替への年月や内容等が付記されている。また、本宮本殿のみならず、末社の建物から神楽所や各種の門、鳥居、蔵、木柵に至るまで、境内の工作物の多くが書き留められている。しかし、表紙の左下に欠損があり、その作成者あるいは作成機関は明らかではない。

古代以来の長い歴史をもつ住吉大社だが、明治期には廃仏毀釈による神宮寺の破却、境内地の近代公園化、それに伴う境内面積の大幅な減少など、大きな変化に見舞われた。また明治期には一回の遷宮を伴う修理が行われており、建物や工作物は変化し、神社空間にも「近代化」が進んだ。「明治貳拾八年十一月十五日 現今建物官営社営略図及明細書」は、その一回の大修理の間に作成されたものである。住吉大社にはさまざまな歴史資料が保管されているが、実は明治中期の社務日誌や建築関係書類等の所蔵は少なく、この文書はその空白期を埋める資料となり得る。

住吉大社の建築に関しては、住吉大社歴史的建造物調査委員会編著『住吉大社歴史的建造物調査報告書』（平成二十一年十月）が出版されている。この報告書は、第四十九回式年遷宮（平成二十一年）に際し、取りまとめられたもので、住吉大社の歴史的建造物について詳細に論じられている。だが明治期の建造物の状況については、上述の通り、住吉大社所蔵の資料では詳細がわからない部分があるため、概要を示すにとどまる部分が見られる。

上記報告書に関わる調査結果の一部を発表したものに、水田丞「住吉大社末社招魂社（旧住吉神宮寺護摩堂）の復原」（平成二十二年度日本建築学会近畿支部研究発表会研究報告集、計画系九一七・九二〇ページ、二〇一〇年）がある。境内にあった神宮寺は、明治期に消滅したが、遺構は移築・転用されていることが知られている。この研究は、住吉大社末社招魂社として現存する旧神宮寺護摩堂を調査し、復原を試みたものである。直接、近代の住吉大社の建築を取り扱うものではないが、明治期の住吉大社では、施設面で大きな変化が起こっていたことがわかる。

「明治貳拾八年十一月十五日 現今建物官営社営略図及明細書」と、住吉大社に残るその前後の時期の資料を比較検討することで、いままでは空白期となっていた明治期の住吉大社の建築および境内の様子を連続的に把握する一助になることが期待される。本稿では、この文書の概要を記しておきたい。

○明治期の修営と本文書の作成時期

『住吉大社歴史的建造物調査報告書』によると、明治期には建造物の修理や屋根の葺替えなどの実施に伴い、二度の遷宮が行われている。まず一度目は明治十年代で、明治十年

からは、住吉大社社頭での大矢数に興行が思い描かれる。さらに、俳聖松尾芭蕉もこの地を訪れ、「升買て分別かはる月見かな」の句を詠んでいる(②)。

住吉周辺には、在地の結社の人々の歌碑、句碑も数多くある。当地においてこそ知られた人々の、それぞれの思いが伝わる碑形であり、碑面である。ひとつひとつじっくりと味わいたい。この報告書において、贅言をひかえて、シンプルに碑の写真と資料との構成によつて、住吉を歩くべしとするのも、ひとつひとつの碑をそのまま受け止めてみたいと考えたからである。碑は碑としてある。碑の背後にある、碑を建てた人々のいとなみを、直接に感じてみたかった。

今回、紹介にもれたものもあるが、それについては、別の機会をえたい。

なお、碑の撮影と資料の収集については、本学大学院学生の大久保北斗、山口翔平、山口龍輝、鷺尾亜莉沙の四氏の献身的な協力を得た。

し恐き 住吉の 我が大御神 船の舳に うしはきいまし 船艫に み立たしまして
さし寄らむ 磯の崎々 漕ぎ泊てむ 泊まり泊まりに 荒き風 波にあはせず 平け
く 率て帰りませ もとの朝廷に)
反歌一首

興浪 辺波莫起 君之船 許芸可徹里来而 津尔泊麻泥 (㉑四二四六)
(沖つ波 辺波な立ちそ 君が船 漕ぎ帰り来て 津に泊るまで)

古事記には、朝鮮半島に向かう神功皇后の夢に墨江の大神の神託があったことが記されるが、万葉人にとって、住吉の神を斎くのは、それがそのまま海の安全を祈ることであった。

これらの歌うたを刻んだ万葉歌碑が、住吉大社周辺に五基ほどある。一九九一年に建立された、住吉大社の反り橋の手前左側に立つ住吉万葉歌碑 (部冊資料⑩) はその代表例。石柱に古代の船を配したユニークな碑形に、十七首の万葉歌が刻まれている。今回は、都合で行けなかったが、安立町の、靱松原公園と異名を持つ安立南公園には、慶雲三 (七〇六) 年の難波行幸時に長皇子のよんだ、
靱打 安良礼松原 住吉乃 弟日娘与 見礼常不飽香聞 (①六五)
(あられ打つ 安良礼松原 住吉の 弟日娘子と 見れど飽かぬかも)
の歌碑もある。

住吉大社は歌道の神でもある。伊勢物語にも住吉の神が登場する。

むかし、帝、住吉に行幸したまひけり。
われみても ひさしくなりぬ 住吉の 岸の姫松 いくよへぬらむ
おほむ神、現形したまひて、
むつまじと 君は白波 みづがきの ひさしきよより いはひそめてき

(百十七段)

このやりとりについては、古今集や伊勢物語の古注、あるいは歌学書などに多くの伝承を伝える。玉津島明神、柿本人麻呂とならんで、和歌三神とされ、多くの歌人、俳人の詣でるところとなった。住吉周辺には、そんな歌碑や句碑も数多く存する。浅沢社から細江川にかけて、俊成、定家、宗良親王、顕昭といった、平安時代から鎌倉時代にかけての歌人の歌碑が並び立つ (別冊資料三四く三七)。

源氏物語には、明石から出てきた明石の上が住吉の社頭で、住吉詣での源氏一行の威勢に臆して舞い戻る様子が描かれる。住吉公園の入り口付近に、「真住吉の国」の記念碑が立つ。これを出発点として、今回の旅ははじまった。

今回、住吉大社周辺の歌碑や句碑といった文学碑を訪ねて住吉周辺を歩くたよりにすることを企画したのだが、文学碑以外にもさまざまな碑があり、それらは、それぞれの建立の由緒書も含めて、住吉の歴史を知るうえで貴重な情報をわれわれに与えてくれている。たとえば、⑮の碑では、御田植神事と新町との関係を知ることができる。また、住吉浄土寺の後村上天皇の歌碑⑳からは、太平記の世界がしのばれるし、西鶴の句碑 (㉒)

住吉文学散歩 歌碑・碑文を手がかりとして

乾 善彦

住吉は名所である。古来、和歌や文学作品に数多く、住吉は登場する。万葉集には、住吉^{すきのえ}を詠んだ歌が神名も含めて四十首ほどあり、その中に、天平六（七三四）年春三月の難波宮行幸の時の歌うたがある。そのうちの一首、

従千沼廻 雨曾零来 四八津之白水郎 網手綱乾有 沾将堪香聞（⑥九九九）
 （千沼回より 雨を降り来る 四極の海人 網手綱干せり 濡れもあへむかも）
 右一首遊覧住吉浜還宮之時道上守部王応詔作歌

この左注にあるように、住吉は難波の宮に赴いた官人たちの遊覧の地であった。官人たちが男女交えて住吉の浜辺に遊ぶ姿は、現在の浜寺のリゾート地を彷彿させる。

大夫者 御猶尔立之 未通女等者 赤裳須素引 清浜備乎（⑥一〇〇一）
 （ますらをは み狩に立たし 娘子らは 赤裳裾引く 清き浜辺を）
 右一首山部宿禰赤人作

馬之歩 押止駐余 住吉之 岸乃黄土 尔保比而将去（⑥一〇〇二）
 （馬の歩み 押さへ留めよ 住吉の 岸の黄土に にほひて行かむ）
 右一首安倍朝臣豊継作

住吉の沿岸部には、「岸の黄土（はにふ）」とよばれる粘土層があり、赤裳とならんで、色鮮やかな沿岸での遊びのようすが思い浮かぶ。

住吉の大神は、海の安全を守る神としてあがめられた。卷十九には、遣唐使を送る時に、住吉の神に旅の安全を祈る歌がある。

民部少輔丹治真人土作歌一首
 住吉尔 伊都久祝之 神言等 行得毛来等毛 舶波早家无（⑩四一四三）
 （住吉に 斎く祝が 神言と 行くとも来とも 船は速けむ）
 天平五年贈入唐使歌一首〈并短歌〉作主未詳

虚見都 山跡乃国 青丹与之 平城京師由 忍照 難波尔久太里 住吉乃 三津尔舶能利 直渡 日入国尔 所遣 和我势能君乎 懸麻久乃 由々志恐伎 墨吉乃 吾大御神 舶乃倍尔 宇之波伎座 舶騰毛尔 御立座而 佐之与良牟 磯乃埼々 許芸波氏牟 泊々尔 荒風 浪尔安波世受 平久 率而可敝理麻世 毛等能国家尔（⑩四二四五）

（そらみつ 大和の国 あをによし 奈良の都ゆ おし照る 難波に下り 住吉の三津に船乗り 直渡り 日の入る国に 遣はさる 我が背の君を かけまくの ゆゆ

